

シヤトルに居られました

私の父の姉の長男

下田申司さんの娘

木森尾メリーさんから

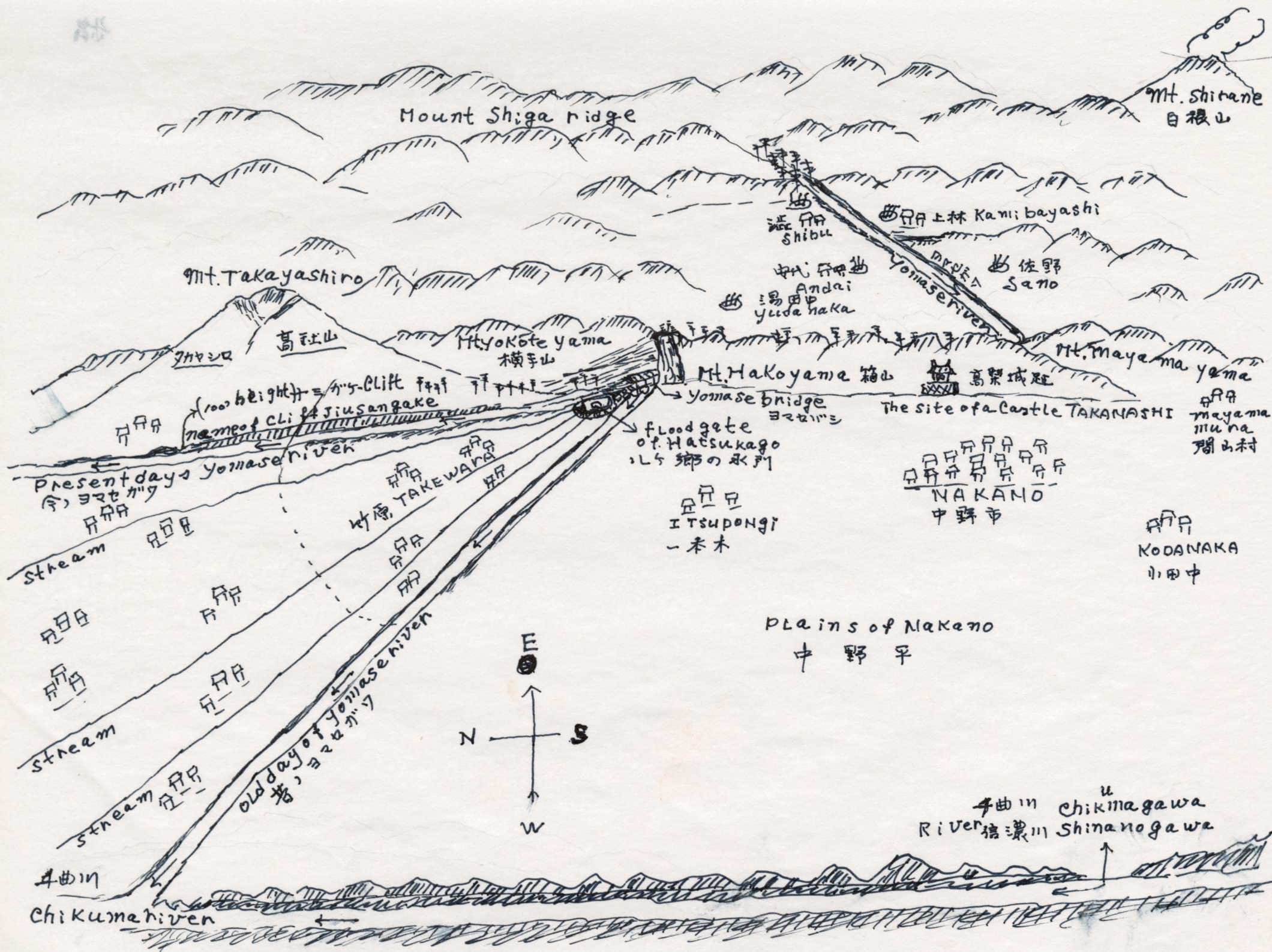
自分の父の家系を知りたいとの事で

記憶をたどりつゝ書きつづりました

千九百四十二年九月十七日

故武田富壽

次男 武田昌二



Mount Shiga ridge

Mt. Shirane
目根山

Mt. Takayashiro
高野山

Mt. Hyokote yama
横手山

Mt. Makoyama 箱山

Mt. Mayama yama

Present days Yomase river
今ヨマセ川

Stream

Stream

Chikuma river
4曲川

name of Cliff Jiusangake
崖の高さ

TAKEWARA
竹原

old day of Yomase river
昔ヨマセ川

Floodgate of Hatsukago
ハツカゴの水門

ITSUPONGI
一本木

Shibu
澁川

Andai
湯田
yu da naka

Kanibayashi
上林

Sano
佐野

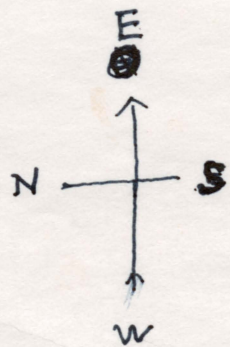
The site of a Castle TAKANASHI

MAYAMA MURAKI
間山村

NAKANO
中野市

KODANAKA
小田中

Plains of Nakano
中野平



Chikimogawa River
信濃川
Shinanogawa
4曲川

昔より日本民族は源平藤橘と源氏平氏藤原氏橘氏といわれて
日本皇室の下に四ツの部族があつたための牝系部族源氏の説明から始めます
源氏一族は日本皇室よりわかれて来たもので代々武士の統領として
皇室と日本の国を護るための武士の頭である将軍となる家柄であつた

今より八百年程前皇室の力が弱まり国が乱れ日本全国に
天皇の命令が行渡らなくなつた時がありました

其の時の源氏の統領であつた源頼朝が大將軍として
天皇のために命令にそむいた多くの家族と戦つて再び日本国中に
天皇の命令が行渡るようにした

此の源頼朝が鎌倉(今の鎌倉市)に幕府を建てた此れを鎌倉幕府といふ
幕府とは皇室にかわつて日本国を治めた武家政治のまじかる事といふのだと思ふ

其の当時信州(長野県)中野町に高梨氏といふ中野平野一面を領し
其の地方を護つて居つた大名が居つた(武士の頭目)

高梨一族は源頼朝と同族であり特に近しい血族でありました
今へ頼朝と最も近い同族であり信州木曾といふ所に(長野県)
居城をもつて居つた木曾義仲と共に源頼朝の日本統一に努力して
戦つた事は日本外史に記録されて居るようです

高梨一族は信州中野平野の東よりの行どまりにあつて中野所から
中野平野にかけて一望の処に見わたせる事の出来る箱山といふ
山石山に居城を築いて居りました
今より八百年の昔の事を思ひます

源頼朝が鎌倉に幕府を建ててから信州(今長野県)長野市にある日本が一番古い皇宮の御寺である善光寺におまいりに来た時、近くにあつた高梨氏の居城をたずね中野平野の仲にあつた湖で魚つりを致し酒盛りをして遊んだ。更科といふ処に船付け神社といふて頼朝を記念して建てた神社がある。今は平野にかわつて居る。

高梨氏が相山に居城を築いてより四百斗程後、又国が乱れ諸国に英雄が割據してたがいに戦いをした。戦国時代といわれた時、甲斐の国(山梨県)から武田信玄といふ源氏の部族の大名が立つて回りの国々の勢力者を皆自分の下に引き付た。

其の時高梨氏も同じ源氏でありながら信玄に攻められ北隣りの国で日本海の真江津ゆんに面して居る越後の国(ニカゴ県)春日山に居城を築いて居つた上杉謙信といふ勢力者のあつた大名の処へのがれて行き、上杉家の客分として受け入れられた。謙信の祖母は高梨家の出である由

高梨木氏(信)といふ武田信玄の死後其の子武田勝頼の時代になり、織田信長と徳川家康といふ両將に攻めほろぼされてしまつた。

其の後で織田信長は又自分の家来明智光秀に攻め殺されてしまつた。其の後色々な戦いの後で豊臣秀吉といふ大將が日本全国を統一したが、間もなく秀吉が病気で死亡し、再び国が乱れ初めた。其の時に

徳川家康といふ大將がついに再び日本全国を統一して江戸(東京市)に徳川幕府を建ててそれから三百斗程の間徳川幕府の武家政治が続いたが、徳川幕府も勢力が弱まり色々な事が起き、ついに幕府の政治を

其の時の天皇であつた明治天皇に返上した。それから天皇、真皇の明治政府が誕生した。今の昭和天皇の祖父の天皇の御でありませう。

二頁の附録

著者 イケナミ 地波正太郎

朝日新聞社発行

サナダ 真田太平記

第八卷百廿四頁よりの抜萃

聖武天皇によつて信濃シナノ国分寺建立の詔が発せられたのは

天平十二年(西暦七四一年)であつたといふ

長野県上田市近郊に建立されて居る

これは信濃のみでなく国家安泰のために天皇の勅願により

諸国ごとに建立の詔が発したのだ

奈良の東大寺は總国分寺である

国分寺の三重の塔を昭和初年に大修復したとき

通村木ミヤモトヨリ種木の事と思ふ)に建久八年の墨書があるを発見した

寺伝に建久八年源頼朝善光寺詣の途次国分寺の

鎮座と數き修覆を加えたることありとある記述を

裏づけるものといつてよいであらう

第二頁に書いてある通り

タカヤシ

源頼朝が善光寺詣りに来た時近くの高梨氏とたずね

湖水で魚釣りを致し酒盛りをして遊んだといふ事をよく

裏書きして居ると思ふ

高梨氏は明治政府の世になるに上杉家の家分としてとどまらず居つた
明治の世になつてしばらくしてから中野竹相山の昔の城後に帰つて来てしばらく
住つて居つた。

これと考へると二百余年の長期間中野に残して行つた同族の家臣と
常に連絡がとられて居つた事を思われる。

明治天皇(真皇)の治世になつてから高梨氏は立派な家柄であるために
明治天皇(子爵)の鑑子(子爵)を贈られ、華族の列に認められたと云つて居る。

高梨氏が武田信玄におかれ越後の上杉謙信をたよつて行つた時
エチゴクニ ウエスギヤシシ

家老の家柄であった細野家を初め多くの家臣は中野にとどまり
澤田家といふて百姓になつて居つた(家老といふ族中の上位であつた多くのマシタニト)

此の細野家があつた時の血まじりでありませう。

高梨氏が竹相山に居城を築き武田信玄におかれ越後の上杉謙信を

たよつて行つた間は四百余年になると思ふが高梨家の家老職であつた
事を考へて見る時細野家の中野どの最も(フルイウヤ)であるといふ事を思ひ
高梨家とも血のつながりもあつた事と言ひられます。

後で細野家と武田家ともかかわりがあつて来ますので
武田家の事を少し書きますと云つておきますと思ひます。

高梨氏が竹相山に居城を築いたと同時代に竹相山の北側から西側にかけて
開拓された部落を竹原といふ今は中野市の北のつづきである。
此の竹原を開拓した者は武田一族である。

其の所原を開拓した当時、相山の東、東側の絶壁から北の角より西側にかけて流れて居つた夜間瀬川からの水を引きつれるには、此処より外にあらぬが、なく、この郷の水門といわれ、今も昔のままに残つて居る。

八百年近しと思われる昔の事であり、それより和共一族は部落の上流として、今日区續いて居る。

高梨氏とは何かの縁故により、兄弟二人で一族を引きつれて、此処に移り、定住したと思われ、水百姓にはなつたが、昔は武士であつたと、代々言ひ傳へられて居る。

それ等の事を考へて見ると、甲斐の武田氏、高梨氏、和共、武田も皆同族、源氏であつても、高梨氏が越後の上杉氏とたよつて行つた当時は、和共、武田族は、甲斐の武田氏とは深い関係はなく、むしろ中野の高梨氏とより親密であつたのではなからうかと考へられる。

徳川幕府の治世になつた時、高梨家が領して居つた中野平野は、徳川幕府の真且チヨウカシとなり、天領といわれ、居つた。高梨家の城後に陣屋ジンヤといわれ、棟を建て、代官処になつて居つた。

明治政府にかつた時、此の陣屋ジンヤ後が中野県庁を置かれたが、其の後、長野県と改まり、善光寺ゼンクウジのある長野市に県庁が移り、再建てられた。

これからが下田家の話に入ります。

武田一族が竹原を開拓してからずっと後の事だと思います。

竹原に新田といふ区域が出来た。此処に下田といふ家もありました。

此の下田家は下の^{シメ}方より来たといわれて居りました。それは竹原から西の^{チクマガウ}方、曲川といふ川すじの下^{シメ}の方より来たといふ事になるのだと思ひます。

長い年月のうちに此の下田家は竹原部落でも^{チビツル}指折の金もちと成りました。

明治の世になつた時此の下田家に後づぎの子供が出来ませんでした。

それで和井の父の生れた家、武田家の^{オシケ}本家といひますが、此の本家には一男一女が居りました。

此の本家の一人娘が居りました。和井の父、富寿の姉、キツ伯母様が美食女として下田家に知られて行きました。そして

中野町の細野家の次男、細野^{ハシノ}羊亮氏を婿に迎へ、キツ伯母様と結婚して下田の姓を名づりました。下田^{ハシノ}羊亮氏。

キツ伯母様と羊亮氏との間に二男二女が生まれたと思ひます。

長男は下田^{シンジ}伸司様、^{メリ}梅屋さんの父上です。

次男は細野^{コトジ}浩三さん、^{ハシノ}細野家の父上です。

細野本家^{ハシノ}羊亮さんの生れた家、此の^{ハシノ}羊亮さんの兄さんには子供が生まれず、後づぎが出来ませんでした。

それで次男の下田^{コトジ}羊亮さんの次男が居ります。下田^{コトジ}浩三さんが細野本家の後づぎとなり、^{ハシノ}細野浩三さんとなりました。

下田家にいつこまつた事が出来ました

それは

きい伯母さまも細野羊亮さん事下田羊亮さまも舊家の育ちで
まことにおうやうに出来て居られ経済といふ事に経験がたりなく
こぼろの間には下田家の財産を大分になくしてしまわれまして、
それで下田家の羊我理の親たるは心配になり相談の結果
きい伯母さんと羊亮さんとに中野の町に隠居住りをしてもらい
下田家が竹原^{タケハラ}に移る前のもとの下の方の親戚から二度目の
養子をとらい此の養子が後をついで下田家の財政の
建てなをしまいたしたのだと聞いてあります

其の様なわけできい伯母さんと羊亮氏とは下田家にわなんの
加^カもなく又血がつながりもなかりわけであります

中野の町に生られてから二人共執心なクリスチヤンになられたと聞いて
あります羊亮さんはどんなに貧乏をして居られてもごゆづらで
心配そうなるよろすもなく而立派であられたとは

メキシコに居られます私の兄上勘^{カンジ}司氏の手紙の中にもありました
下田伸司様は細野家と武田家の血を受けついで居られる事になります
それで細野武田下田伸司様と申せばはつきりとわかる事になります

森尾メリーさんと細野寛^{ヒロシ}さんはいここになります

私の父武田富^{トミジユ}寿は下田伸司様の叔父になります

又細野浩三様の叔父にもなります

下田伸司様と次男であられる細野浩三様と私武田昌二は
いとこになります

其のようなわけでありますので此の度のおたずねには

細野家・武田家の起りを念のために書き記しておきました

物共の先祖武田一族が竹原部落を開拓してより八百年前になるといふ
事につきはつきりするために今ハッ書きましたとおきたいと思ひます

ジョー・ド・シニシタ

シニラン

ミナモトヨリトモ

浄土真宗佛教の開祖親鸞聖人の御母は源頼朝のいとこであつた事は
原史にも記されてありますとして藤原家でもあまり上位でない家の人と
結婚された間に聖人はお生まれになり早くから佛門につられた方でありませう
当時の皇室の廻りの権力者たちにより宗門の事と沖の法然聖人と共に
流罪となられ親鸞聖人は越後の国(ニガタ県)高田に流罪とされられました
親鸞聖人の一番目の御弟子は高田に流罪となつて居られた時に御弟子と
なられた人であつた

聖人は其の後罪を許されてから晩年は京都に帰られてから京都で亡くなられた
時その御弟子さんもお処に居られました として聖人の御骨をわけもらひ
越後の高田に帰られる途中物共の大本家で一冬を過ごされたから越後の高田に
帰られ御寺と建てたから檀家にといふ事で其処の檀家になつたといふ事です
親鸞聖人がお生まれになられてから八百年余り九十歳でおなぐりになられてから
今年が七百廿二年程と思ひます

物共先祖が竹原を開拓した時代と同時代といふ事になります

(親鸞聖人の七十三歳正月に京都に生る。一ニヤ三年一月十日往く九十歳)

これは先祖代々から言ひ傳えられていた事を私が父から聞いて居りました
事の記憶をたどりたう書き記しましたが昔の事でもあり
年月日なども多少のまちがひはあるかも知れませんが
大体のすじ道は通つて居ると言ひて居ります

一九百廿二年九月下旬

故武田富壽

女男 武田昌二 謹んでえを記す

九十歳の時 加州サンバセ市に於て

餘録

此の度此の記録を作り上げる迄に色々とお世話になりました。

小山家の小山ユリ様が両書き下さりました。家系図をゴウんになれば
よくおわかりになれると思つます。小山家は私の妻千鶴の実家でもあります。

中野の下田家につき今一筆を書きとえておきます。

下田伸司様の弟細野浩三様は、日本ボイスカウトの初代総裁であられた。

ふたあらい伯爵(皇族)の秘書をつとめて居られ台湾にボイスカウトを創立の時

選ばれて台湾での盡力中第二世界大戦となり中野に帰られ王した。

下田伸司様の両妹様の内一人は師範卒中野高等小学校に奉職。

今兩人の妹様は看護婦の学校を卒業され長野市の赤十字病院に

勤務中おとも若死をされました。

メリー・木村尾様の母美津子さまの姉上は中野町の吉谷家に嫁入りをされて

居られます戦後廻りの村々が中野町に併合されて中野市に改たまつた時の

初代市長に選ばれた家でもあります。

吉谷家は細野家。武田本家。昔親戚であります。

吉谷家は私共の母の実家である。土屋家昔親戚であります。

土屋家の祖母は私共の家(武田本家からの分家)のせれであります。

土屋家の叔父上は二人共中野町町長をつとめられました。

武田本家の利川氏は中野町に併合される前平岡村の最後の村長であります。

此の記録をかきまこと九百三十五年現在お々かたの家は代がわりになつて居ると思つます。

現在メリーさんにもつとも近の方は細野浩三様の長男細野完とと思つます。

実さんは大学で鉱山学を専攻戦後日録鉱山コンサルタント株式会社に入社

マウニングコンサルタントとして世界中を廻られて居られまことかがう。

以上此の度のおたすみの下田伸司様の家系と其のまわりの概略であります。

本がき

墨土がほやける

此の度は再々に渡りごめんどうを両かけ致しまして恐れつつ居ります
下田家の家系につき第百頁の事につき私の誤はかな考えから

暗い字ばかりを書き居る事に気がつきました

後々に残るものでありますので書きなをしましておいた方がよいと思
書きなをこするつもりで居りました

先頃高田静子様のお宅へ御札の御挨拶におらかがい致しました時
書きなをしの事を御相談致しました処 あれはかえつてありま
まの
方がよいと思ひますとの御意見であられましたので そのままに致して

おく事に致しました

其の時静子様がお外にまたわかつて居る事がありましたなら書き
加えておかれるのがよいとの御注意ごありました

それと今少し明さい方も書きなをそえておきたいと思ひました

別紙に餘録 として書き記しました又御めりわくの事と存じますが

高田静子様に残りの翻譯を御願ひ致して下さいますとよろか

くとして又厚がましい事でもあります

ユリさんにスタンプをして戴いて最後の仕上げをしていただき度
勝手な事でございすがどうかヘルプをして下さりませんか

御願ひを致します これは急がなく共よいのでございすから

乙未年九月

白田

満枝様
ユリ様

此の度私昌二が書きつづりました下田家の家系の翻譯は
高田静子様のお援助を得ました。日本に留学をされ其の後
サンゼステート大学を卒業後当サンゼ市のグラマスクールの
先主を務めても居られました両方ごあります
静子様は小山家とお昵懇の両方ごあります

家系圖作り。タイプ・装表其の他は私昌二の妻千鶴の奥家である

小山家の 小山ユリさんの御骨折りによりました

小山ユリさんは当サンゼ地区のハイスクールの先主を長年に渡り
務めて居られる両方ごあります

此処に謹んで一筆書きを呈えまして
深く御厚意の程と感謝致します

千九百廿三年十二月

武田昌二